

## 『夜明け前』 試論

瓜 生 清

### 【要 旨】

本論では、序の章の山林事件を読み解くことで、青山半蔵父子の意識の違いを明らかにし、それを通して、主人公が父を凌駕する村総代への責務意識に献身する人間へ変貌していくことを明らかにした。馬籠宿が東山道の「中央」に当たる地勢上の位置は、激動する歴史を目撃させる恰好の舞台となつてると同時に、主人公が平田派の活動の二大拠点であった伊那・東濃の集団を取り持つ役割の両義性があることも明らかである。平田派の復古の活動を作品の基軸に据えた『夜明け前』の史実解釈については、服部之総の厳しい評価がある。しかし、『夜明け前』において、平田派全盛時代を明治三年であると強調する史的価値づけは、私心のない平田鉄胤に結集していく群像の活動に、平田派国学運動の精華があつたとする筋道の通つた説明が行われていることを意味している。

### 【キーワード】

序の章、父子の対照的な責務意識、中央の位置、服部之総への疑問、平田派国学運動の展開

はじめに―研究の視点と方法を求めて―

島崎藤村が生前完成させた最大の長篇『夜明け前』（注1）についての研究的蓄積は、すでに夥しいものがある。即座に汗牛充棟という慣用句を想起させる状況である。それらの論究には、いまだに色あせない今後の指針となる卓抜な見解を含んでいることは贅言するまでもない。以下、作品理解に裨益することの多い先行研究の見解を確認しながら、論述の方向性を見定めていきたい。

藤村文学を自閉的な自伝的文学の体系化という通念から解放し、類まれな視野の広さと旺盛な批評精神の活動の軌跡を特筆大書して研究史上の意義を失っていないのが、亀井勝一郎（注2）である。亀井は作品を作者と癒着させた平野謙流の詮索的批評に異議を唱え、いち早く「作品論」を標榜したことでも意義深い。そのような自負に違わず、亀井は『夜明け前』を読解する基本的な方向性に有益な考察を打ち込んでいる。つまり、島崎藤村の国学解釈は、青山半蔵の「思想消化における個性」となり、それが自己沈潜する「独語」という表現方法で書かれたユニークな形象であることに注目している。亀井が指摘した「独語」という方法は、半蔵の内部で粘り強く持続する思考の深化過程を、「内言語」の表現を採用して描いていると訂正すべきであろう。ともかくも、本居宣長等の国学者に深く感化されていく半蔵が、国学思想にのめりこみ熱中するさまの表現は、第一部下巻第十二章第四節

(注3)において、半蔵が諳んじるまでになった枕頭の書『直毘靈』の本文について沈黙考する場面を始めとして、「内言語」を使った精彩に富んだ書き方が繰返し行われている。亀井の分析の着眼点は、「内言語」を使った思想の個性化の表現と読み替えることで示唆深い教示となるが、このことについては、その後の研究で本格的に継承されたとは言い難いように思われる。

その他、作品を読む基本的観点について、伊豆利彦(注4)が、史実を金科玉条視する論法に対して疑問を表明し注意喚起していることも研究史上忘れることのできないものである。伊豆は次のように明快に説いている。「平田派国学と「王政復古」の理想は、この現実苦しむ半蔵が、自分自身の生活を支え、魂を支える柱として見出したもので、半蔵の平田派国学であり、「王政復古」の理想であった。それは半蔵の現実、半蔵の思想からあきらかにされるべきもので、逆に平田派の国学や「王政復古」の現実から、半蔵の生涯、その思想が論じられるべきではない。」もちろん私は、「まことの革命への道」を探り求めたという伊豆の積極的過ぎる主題把握には疑問を持っているが、伊豆の説いた方法的立場に賛意を表したく思う。これは史料を厳正に取り扱う歴史学の立場から縦横無尽の批判を浴びせた服部之総(注5)を始めとする『夜明け前』批判への反論となっている。そして、先走って言うことになるが、半蔵の国学学びのプロセスと復古運動への参画は、平田篤胤歿後の私心のない清廉な後継者鉄胤に領導される至誠の群像と絆を強化して行った交友関係として描かれており、そのことを通じて平田派国学運動史の筋道立った史的意義づけを行おうとしている。つまり、『夜明け前』は、平田鉄胤に結集した運動の盛衰史に焦点が当てられ、そこに献身した半蔵の半生を浮き彫りにすることを主眼としているのであり、服部之総が、『夜明け前』の平田派全盛時期の理解に重大な「錯覚」があるという批判については再検討を行っていく必要がある。

伊豆論が強調した苦言に、同時期の饗庭孝男(注6)の「根本的に表現されたものとしての作品がもたらす魅力、その言語空間が全体として放つ独自の味わいの磁場にふみこんでいない」という手厳しい指摘を重ねると、『夜明け前』における内言語の表現を駆使した半蔵の思考の個性化、鉄胤に領導される平田派国学運動の史的位置づけなどが、大きな検討課題になってくるのである。

#### 本論・その一 序の章について

「木曾路はすべて山の中である。」という人口に膾炙した有名な名文で始まる序の章第一節は、東海道と並んで江戸・京都間を往来する交通の要衝となった東山道の中央に位置する木曾路の沿革・地勢を、雄大な回顧の視線で紹介する導入として遺憾がない。幽邃な山林に包まれた街道の説明は、「嶮岨な山坂の多い」(一)〈傍線稿者、以下同様〉という木曾路独特の地勢について強調する。所与の自然条件である峻しい山岳と急峻な谷が織りなす地形の表現は、耕地に恵まれぬ木曾路に生きる民衆の困難な生活舞台の暗喩である。そして、第三節の木曾地方の民衆が強いられた厳格な森林保護政策と民衆の生活の矛盾が集中的に発現した「背伐り」事件は、全五節の中で最も緊迫した一幕を作り、作品展開上の布石としても重要な機能を有している。第四節は、節儉を課し華美を戒める厳重な統制を押しつけた天保の改革という幕政改革の時代においても、芭蕉句碑の建立に集って俳諧を楽しむゆとりがあった風雅の一端が、小休止的に挿入される。最終の第五節は、年号と季節のみを記す緩やかな時間記述が一変させられ、歴史小説の現在時間に突入する。すなわち、ペリー浦賀来航の噂が、早飛脚によって七日後の「嘉永六年六月十日の晩」と詳細に明示される。この一変した時間の記述は、以後本章の歴史小説の現実時間

に接続していくのである。併せて、突如出現した外来の強大な軍事的威圧を契機に、幕藩体制とその内治の行き詰まりの前兆のような不吉なうわさ、村民の動揺等を複合させた最終節は、以降に展開する激動のドラマの開始を予告する周到なプロローグとなっている。

さて、序の章第三節の「背伐り」の大罪を犯した村民に審判が下される周知の場面について、三好行雄（注7）は、「この場面はやがて支配者と被支配者との中間的存在に成長するはずの半蔵の位置を暗示し、小説の重要なモチーフを潜在させている。半蔵自身、貧窮な黒鍬ものの運命を思いやるときに、この日の光景を想起する（第一部第二章の四）。のちの展開のための伏線として、作者があえて少年の眼と、水呑百姓の嘆きとを挿入した意図は明白だろう。」と、作品の展開上の布石となる呼応表現の設定について分析している（注8）。

「十八歳」の半蔵が「眼を据えて、役人のすることや、腰縄につなされた村の人達のさま」を、怒りを抑えて注視する姿が印象深いのが、のちに貧しい下層の民衆の困苦を見かねて請願する庄屋に成長していく予兆であることを明確にするためにも、事件の処理に忙殺された父吉左衛門が、結局のところ支配権力に対して恭順する庄屋であったことを明らかにしておく必要がある。

村民から「六十一人」の罪人を出したことは、「村の歴史として曾て聞かなかつたこと」、つまり、馬籠宿を震撼させた「前代未聞」（二）の大事件であった。そのことは、庄屋である吉左衛門に、末端まで封建支配体制の法令を順守させる監督者意識、村民の困窮を支配権力側に請願する村落総代としての責務意識の両面から、「一生忘れられない出来事の一つ」として深く記憶に刻印されることになったのである（注9）。

この人数が、小規模の禁令破りでなかったことは一目瞭然であるが、念のため、馬籠宿とその周辺の住民にとって、桁違いの禁令違反事件であったことを再確認しておきたい。それは、宿場とそれに付属

する集落の戸数を確認してみると明白である。街道制度に直接従事する本陣・問屋等の上の階層が「百軒ばかりの家々」（一）を構成している。それに対して、「六十軒ばかり」（同上）が下層の集落なのである。禁令の五木を盗伐したのが、「小前」と総称されている貧しい水呑百姓であるの言うまでもない。その結果、「六十一人」という人数は、下層農民の各戸平均一人が罪を犯すという権力側を驚愕させた出来事であったのである。補足すると、「手錠」を免ぜられた老人、「お叱り」で罪を許された死者は、この「六十一人」に含まれない。要するに、「嶮岨な山坂」という所与の厳しい生活環境が因となった必然の事件であり、街道人として物覚えがよい伏見屋金兵衛の十八番である「前代未聞」という常套文句に相当する悲劇的事件なのである。

「吟味」の布告と同時に、多数の村民が盗伐の後始末にうろたえる恐慌状態が書かれていることから、厳禁を犯す犯罪行為が常態化していたこと、裏返せば民衆の生活レベルの恒常的な疲弊状態を意味する。もちろん、村落共同体の表裏に通じている庄屋吉左衛門は、「嶮岨」な地形の生活条件が「前代未聞」の罪人を結果した因果の必然性について承知しているはずである。吉左衛門は、民衆救済の請願をおこなう庄屋の責務意識から、従前も「背伐りの厳禁を犯した村民のため言ひ開き」（三）をしてきたのであるから、今回も、事件の真相が過酷な森林保護にあることまで踏み込み主張することは出来なかったにしても、村民への減刑を訴える方法もあつたはずである。しかし、吉左衛門は、裁く役人と裁かれる村民を「眼を据えて」注視する半蔵を追い払いこそすれ、村民の意思を上申する代弁役を買って出ることにはなかつたのである。

減刑などの具体的な取り成しを一切しなかつた吉左衛門は、庄屋としての監督不行き届きを恐縮したのであろう。裁く役人の威令に聴従したことになる。その結果、差添人である村総代の助勢を得られなかつた「小前」は、意を決して禁令破りの切羽詰まった理由について、

「木曾は御承知の通りな山の中で御座います。こんな田畑もすくないやうな土地で御座います。御役人様の前ですが、山の林にでも継るより外に、わたくしどもの立つ瀬は御座いませぬ。」と、懇願する孤立無援の困難さに立たされることになるのである。

要するに、温厚な長者風の父吉左衛門が、支配権力に恭順する中間支配階級の庄屋とすれば、若輩の半蔵は、復古の理想に思想的に成熟するにつれて、「小前」に寄り添う異端の庄屋に変貌していく予兆としての一途な面構えを印象づけている。父子間の庄屋についての職責意識の違いは、種々考えや行動の相違に直結していくことになる。そのことを確認する手順として、吉左衛門が支配階級からどのように評価されていたかについて瞥見する。

第一部上巻第一章の内容は、吉左衛門が木曾福島の代官山村氏から晴れがましい恩賞に与ることになった慶事から始まる。山村氏の借財返済への協力が、非の打ちどころのない忠誠心を發揮したものであったことについて、次のような沙汰が告げられる。「其方儀、御勝手御仕法立てに就き、頼母子講御世話方格別に存じ入り、小前の諭し方も行届き、その上、自身にも別段御奉公申し上げ、奇特の事に候。」つまり、支配者から見ても上意下達の申し分のない精励ぶりが、褒美としての「一代苗字帯刀御免」という恩賞を結果するのである。同様のことは、尾州藩からも藩の財政困難に対して多年尽力したことを表彰して、二・三回にも互つて、一度は一代苗字帯刀、一度は永代苗字帯刀、一度は藩主に謁見の資格を許すとの書付を贈られてゐた」（一・下・八（二））のである。支配階級にとつては、奉公を怠らない忠義に厚い庄屋として遺憾がなかったのである。見方を変えれば、上納金に尽力した功績は、庄屋の面目が保たれるようにするしかない貧しい民衆に押しつけた献金によって成就したものである。下々を論じて上納に従わせたのが、名字帯刀の理由である。庄屋の中間支配層的機能を別括してはなはだ痛烈である。「あの御勘定所の御役人なぞが御殿様か

らの御言葉だなんて、献金の世話を頼みに出張して来て、吾家の床柱の前にでも坐り込まれると、わたしは又かと思ふ。（中略）その御役人の行つてしまつた後では、わたしはどんな無理なことでも聞かなくちや成らないやうな気がする……」（一・上・一（二））と、苦しい胸の内を述懐しているが、結局武家政治の身分秩序の維持を優先するのが吉左衛門なのである。

一方、第一部下巻第十二章で、半蔵は前年に続く凶作に苦しむ貧民を救済するために米の買い入れに奔走するだけでなく、「庄屋としての彼は、どんな骨折りでなくても、小前の者を救はねばならないと考へた。この際、木曾福島からの見分奉行の出張を求め、場合によつては尾州代官山村甚兵衛氏を煩はし、木曾谷中の不作を名古屋へ訴へ、すくなくも御年貢上納の半減を聴き入れて貰ひたいと考へた。」（一・下・十二（二））と、細民への憐憫を請願行動に移そうとしている。その強い使命感は、遂に問題の根本に横たわる馬籠宿の維持困難な現状について、「領主たる尾州家に宿相続救助の願書を差し出さうと決心」（一・下・十二（三））するに至るのである。半蔵が、年来中心に鬱積させていた訴えを克明に記した「願書」において、木曾路の住民の生活を重く圧迫する困難さの符牒であった序の章第一節の「嶮岨」という語句を、「元來嶮岨の瘦地、山間僅かの田畑にて、（中略）至つて助成薄く、毎年借財相かさみ、難渋あり候」の条を始めとして、合計四回も反復強調している。序の章第三節で「木曾は御承知の通りな山の中で御座います。」と零細な農民が訴えた「嶮岨」という悪条件は、それに立ち向つて責務意識を貫徹する庄屋半蔵によつて受け止められる表現構造を整えているのである。その「願書」の末尾に書かれた「馬籠宿 庄屋問屋」の署名は、形式的な書式の意味と異なり、木曾人民の貧困の真相を浮かび上がらせようとする村総代の告発的な請願なのである。ここに、序の章第三節において、怒りを抑えて裁きの現場を凝視した青年半蔵が、父吉左衛門を上回る責務意識を実行す

る庄屋として成長した雄姿があるのである。序の章の「嶮岨」をめぐる表現の積み重ねは、半蔵が森林の用材を慣習に基づいて利用することが許されていた歴史的な経緯を踏まえて、山林問題の解決を悲願とする展開に関係しているのである。

第一部上巻第六章第四節に、本陣間屋庄屋の三役に精励した父吉左衛門の退役が間近になった時、吉左衛門が代々青山家に大事に承継された相続書類一式を半蔵に託す場面がある。その中でわざわざ「大切な古帳」と断って委託した書類の中に、「木曾山中の御免荷物」として、「森林保護の目的から伐採を禁じられてゐる五木の中でも、毎年二百駄づゝの檜、樅の類の馬籠村にも許されて来たことが、その中に明記してあつた。」という重要な記事を確認する。「一駄」とは馬一頭に負わせる荷をいう。吉左衛門は、「背伐り」の罪科を犯した村民と、五木を厳重に取り締まった尾張藩でさえ民生の安定を図るために馬籠村に二百頭分の用材の割り当てを許可していたという「古帳」の記録を関連させることはなかつた。

しかし、半蔵は恭順する一方の父を乗り越えて、民生上の施策という「事実」から「山林事件」の背後に隠されていた「真相」へ踏み出すことになる。それは、父から委譲された家伝の「古帳」を再度吟味しなおす第二部下巻第八章第二節である。「こんな動かさせない歴史がある。半蔵はそれらの事実から、さらにこの地方の真相を探り求めて、所謂木曾谷中の御免檜物荷物なるものに突き当たつた。父吉左衛門が彼に残して行つた青山家の古帳にも、そのことは出てゐる。それは尾州藩でも幕府直轄時代からの意志を重んじ、年々山から伐り出す檜類のうち白木六千駄を谷中の百姓共に与へるのを指す。それを御免檜物といふ。」木曾谷の人民は、六千駄の半分を生業用の資材として利用することが出来、残りの半分は相当額の金銭として給付されたのである。そして、馬籠村への配分の明細は、二百駄相当の檜、樅の類が許可されてきたことが、「その古帳の中に明記してある。」と、記録の

明証性を再確認するのである。

このようにして、半蔵は権力の支配秩序を遵守する旦那衆的な父を乗り越え、厳格な森林保護の強制においても、苛政は虎よりも猛しの愚を回避する最低限の民生保護の施策を用意していた治世の「事実」を根拠に、請願に乗り出していくのである。富農の側に位置する半蔵が、貧農と距離を縮めようとする庄屋として書かれていくことに違和感を述べているのが服部之総である。半蔵は、問屋の九太夫から「神葬祭」(一・上・六(二))の自説に固執した一件で異分子扱いされるだけではない。その異色な庄屋である所以は、上意下達式の村民統治の諸業務には精励することが少なく、逆に窮乏の底に喘ぐ下層の人間の側に寄り添って請願する村総代の職務に誠実であろうとすると求められるのである。

序の章の背伐りの厳禁を犯して処罰された小前が、森林資源から排除されることの死活問題を訴えた条は、半蔵が委譲された「古帳」の内容を再確認することで、乏しいながらも民生保護の治世が行われていた具体的な事実性を積み重ねていく。これらの一貫する表現の脈絡によつて、第二部下巻第八章第二節で、維新後、官有林に全て編入されたために盗伐者が続出する山林事件の全面解決を目指して、半蔵が「木曾谷三十三ヶ村の総代」として筑摩県庁に請願する運動の中心人物へと大きく変貌していく展開が可能になっているのである。

#### 本論・その二

##### (一) 作品の構造を見とす「中央の位置」

第一部下巻第八章第二節に、木曾街道、及び馬籠宿の地勢上の位置が、江戸・京都間の「中央」にあることを三回に亘つて同語反復した条がある。それは、次のような「中央」をことさらに強調した説明である。

東山道にある木曾十一宿の位置は、江戸と京都のおよそ中央のところにあたる。精しく言へば、鳥居峠あたりをその実際の中央にして、それから十五里あまり西寄りのところに馬籠の宿があるが、大体に十一宿を引きくめて中央の位置と見てい、。

地図上のピンポイントの正確な位置関係の記述を絡めながら、歴史の進展に関わる地勢上の好位置を巨視的かつ客観的に説明している。

当然のことながら、このような馬籠宿が街道上の要衝の位置にあることを念押しした表現については、すでに先行論文が言及済みのことである。例えば、三好行雄(注10)の簡にして要を得た説明がある。「藤村はおそらく偶然に、きわめてめぐまれた視点をとらえた。〈江戸と京都といふ東西の両重心からほぼ等距離にある〉馬籠宿は、たんに交通制度上の一要地としてだけでなく、政治および社会経済上の一支柱としての意義も大きい。作者はそれを具体的にえがきこむことで、うつりゆく時代と人心の足音を確実にききとったのである。」地図上において、「偶然」中央であった位置関係は、半蔵が国学を独学する学びの環境から、伊那と東濃の平田派の集団組織まで交友が拡大するにつれて、その中央部にいる平田篤胤歿後門人である半蔵の位置が積極的に意味づけ直されていくことに気づくのである。そのことは後述するとして、この「江戸と京都のおよそ中央のところ」に選びとられた舞台を通じて、有名無名を問わず人の行き来する交通が、歴史を織り時代を紡ぐことを確認しようとしたのである。

本陣の当主である半蔵は、街道を西下・東上する様々な旅人の目撃者になる。第一部下巻第十一章第一節では、尊王攘夷の兵を挙げ西下する水戸浪士の一行の義拳に同情と斡旋をしたり、東上する例としては、外国奉行主席の要職にあつて開港交渉に尽瘁した幕閣の要人山口駿河が、一身を捨てて条約の勅許を得ることで時局に活路を齎そうとした苦渋の姿を目撃したり(一・下・十一(五))、街道を行き交う重要な集団・個人の通行を間近に目撃することで、歴史の舞台において

選びとられた政治・外交・経済の動向の交錯点に立つのである。

それから、半蔵が国学学びを通じて封建体制への批判意識を強めていくことと並行して、馬籠宿が、政治の二大拠点である江戸と京都に対して中間部に隔てられていることは、情報に不案内な半蔵の内面劇に、すくなく影響を及ぼしていく。平田派国学運動の一翼にある半蔵は、復古を求める時代の機運を強く感得すればするだけ、状況の行方を決定づける吉報の到来を固唾を呑んで待ち焦がれることになり、事態の推移についての正確な情報が得られないもどかしさに焦燥を深めるのである。例えば、第一部下巻第十二章第六節に、友人香蔵から借り受けた写本に目を通した半蔵は、復古の機運は「草叢の中」から澎湃として起こった必然であるという主張に感奮させられる。復古の期待を高ぶらせた半蔵は、事態を掌握できない情報不足に苛立つて、「こんな山の中にもたんぢや、さつぱり様子が分らん。王政復古の日はもう来てあるんぢやないか。」と、中津川の香蔵を訪ねて京都の様子を確認しようと思ひ立つ条などが思いあわされる。半蔵の憂慮と期待を緋い交ぜにした心理劇の背景に、江戸と京都という国内政治の二大拠点から馬籠に伝播する情報伝達のタイムラグがあったことを付け加えておきたい。

#### 本論・その二

##### (二) 半蔵の平田派集団を連携させる「中央の位置」

概要な街道の「中央」を強調する表現は、往来する人々の通行、政治・外交・軍事上の情報等が交錯する位置関係に限定するのではなく、思想を成長させていく半蔵が伊那地方をはじめとする国学者集団に関わっていく「中央の位置」の両義の機能を持っていると考えるべきである。けっして三好行雄(注11)がいうような「偶然」に選ばれた設定ではないであろう。

それは、半蔵の国学上の活動と連動して書かれる。例えば、第一部上巻第五章第三節に、平田篤胤歿後の門人として国学へ傾倒する半蔵は、信濃国において最大多数の平田派門人を擁した伊那地方と、学友として交わりを深める中津川の蜂谷香蔵・同じく浅見景蔵を念頭において、伊那谷とそれに準じる門人を輩出している東濃地方の二大拠点の活動を連携させる意気込みを、つぎのように強調する。

半蔵にして見ると、彼はこの伊那地方の人達を東美濃の同志に結びつける中央の位置に自分を見出したのである。賀茂真淵から本居宣長、本居宣長から平田篤胤と、諸大人の承継継ぎ承継継ぎして来たものを消えない学問の燈火に譬へるなら、彼は木曾のやうな深い山の中に住みながらも、一方には伊那の谷の方を望み、一方には親しい友達のゐる中津川から、落合、附智、久々里、大井、岩村、苗木などの美濃の方にまで、あそこにも、こゝにもと、その燈火を数へて見ることが出来た。

半蔵と中津川の香蔵は、その後も直接の往来や手紙等を介して頻繁に親交を深めていくが、半蔵と伊那の篤胤歿後門人との交流は、伊那地方の門人有志によって情熱的に取り組まれている篤胤の名著『古史伝』三十一巻の上木（一・上・五（三））や、国学四大人の業績を偲んで御霊をまつる条山神社創立の記念事業（一・下・十一（二））等の協力を通じて、復古の精神に突き進む同士の高揚する連帯感と信頼の絆を深めていく。いずれも半蔵と伊那同門衆との一致共同の関係を確認できるエピソードである。くだいようだが、後にも「先師遺著『古史伝』三十一巻の上木頒布に、山吹社中発起の条山神社の創設に、殆んど平田研究者の苗木とも言ふべき谷間であつた伊那」（二・下・九・（五））について、半蔵が国学活動の重要な共同事業を情熱的に展開した平田派の本拠地として敬意を払い続けている箇所を挙げる事が出来る。

ところで、上記の「中央の位置」に自己を位置づける認識は、全国

に浸透する平田派の勢力地図において、「伊那地方」（一・上・五（三））と「東美濃」（同上）が占める隆盛ぶりを平田篤胤歿後の入門者数で押さえると、復古運動をつなぐ結節点を自負した「中央の位置」という表現は決して不穏当と決めつけることはできない。市村威人『伊那尊王思想史』（注12）の復刊に寄せた北小路健の推薦文にも指摘されているが、同書「第三章 平田学の伝播」の「第三節 平田門人の蕃衍」に、「歿後門人になると、信濃の門人数は一躍して全国中の首位を占め、篤胤と最も縁故の深い秋田地方を遙に凌駕して居る。／次に、信濃国に於ては伊那郡は他郡を凌駕する最大多数である。単に、門人数のみによつて、本学普及の全般を窺はんとするには、少し無理があるかも知れないが、然し此の数字は伊那郡での平田学の氣勢が如何に昂昇して居たか、といふことを如実に顕はしてゐるものと云はねばならない。」と、入門者数の動向から全国の平田派国学の趨勢を整理し、信濃国、なかんずく伊那郡が他を圧倒する盛行になつていと述べている。上記の「第三節 平田門人の蕃衍」によると、「東美濃の平田門人」については、「東美濃の中津川、落合及苗木の平田門流の勢力も、中々盛んで、其数、百余名に達した。」と、その盛況ぶりを伝えている。東美濃は、「信濃国平田篤胤歿後門人数一覽表 附東濃地方〔安政元年より明治七年に至る二十二年間〕」（注13）によると、累積で三百八十六人の最大多数の門人を擁した伊那郡に次ぐ数を誇つていたのである。半蔵の若気の気負いに目をつぶれば、興隆する平田学の二大地点を橋渡しするという書き方は、決して無稽のことではないのである。以上、数値上から平田派活動の二大拠点に挟まれた「中央の位置」について確認した。

平田派の学徒として成長する半蔵の内面に目を向けるならば、その自負心は一層無根拠な錯覚ではなくなる。当初は「自分は独学で、そして固陋だ。もとよりこんな山の中にあつて見聞も寡い。どうかして自分のやうなものでも、もつと学びたい。」（一・上・一（二））と、優

れた師を得られない浅学非才の村夫子を自嘲する半蔵であったが、この国学四大人の系譜に繋がる自覚から主体的に思索を深めていく成長によって、半蔵が平田派相互を連結する「中央の位置」という言い回しは、軽薄な自惚れではなかったことが明らかになっていく。それは、第一部下巻第十一章第二節に、半蔵が飯田在の平田門人を歴訪し意気投合した結果、とうとう年を越してしまふ長期滞在中に起こった覚醒である。未知の友と誼みを結んだ交友、山吹社中の篤胤研究会への参画等、半蔵の滞在中に蓄積された「刺激」は、従前と一線を画する具体的な思想の賜物を用意することになった。

それは、「この小さな旅は、しかし平田門人としての半蔵の眼をいくらかでも開けることに役立った。」と控えめな書き方で始まるパラグラフに続いて、一息に思想を深化させる体験が、四大人として崇められる賀茂真淵の『歌意考』、本居宣長の『直毘霊』の著述を諳んじている半蔵の内言語となつて、鮮烈に表出されるのである。枕頭の書の文面を脳裏に辿り、沈黙考する半蔵の熱い内的世界の描出である。

「あはれく上つ代は人の心ひたぶるに直くぞありける。」

先人の言ふこの上つ代とは何か。その時になつて見ると、この上つ代はこれまで彼がかりそめに考へてゐたやうなものではなかつた。世に所謂古代ではもとよりなかつた。言つて見れば、それこそ本居平田諸大人が発見した上つ代である。中世以来の武家時代に生れ、何の道かの道といふ異国の沙汰にほだされ、仁義礼讓孝悌忠信などやかましい名をくさぐさ作り設けて厳しく人間を縛りつけてしまつた封建社会の空気の中に立ちながらも、本居平田諸大人のみがこの暗い世界に探り得たものこそ、その上つ代である。国学者としての大きな諸先輩が創造の偉業は、古ながらの古に帰れと教へたところにあるのではなくて、新しき古を発見したところにある。

先人賀茂真淵が『歌意考』(注14)において「あはれあはれ、上つ代には、人の心ひたぶるに、直くなむありける。」と詠嘆した感動に思いを重ねて、半蔵は「上つ代」とは何かという問いかけに答えられる思索の進展として、率直かつ純粹であった古代人を発見した感動的な了解の体験を唱和しているのである。その内部を敷衍して説明するならば、『歌意考』が賛美する古代人への覚醒が、これまでの実体を見誤つた不十分な理解、遠い昔という世上の解釈からの影響等を根本から払拭して闡明された認識へ参入することが出来た驚異と感動となつて、半蔵にもたらされたのである。ちなみに、『歌意考』の本文と、考えに耽る半蔵の内言語の表現との間には微妙であるが差異がある。しかし、これは、思考に没頭する半蔵の内面の言語化と考えれば、細部に異同が生じても一向に問題はないのである。

さて、前掲の引用本文に付した傍線部は、『直毘霊』の「さて其道といふ物のさまは、いかなるぞといへば、仁義礼讓孝悌忠信などいふ、こちたき名どもを、くさぐさ作り設て、人をきびしく教へおもむけむとぞすなる」に該当する条である(注15)。この引用本文は、黙想しつつ文意を玩味し辿つていく半蔵の内省のプロセスを記述したものである。当然、『歌意考』の場合と同様に、文章に異同があるが、これも半蔵の内部表出と考えれば、異同が生じても不思議ではない。思索に打ち込む半蔵の思考の流れは、真淵が直感した古代人の「直ぐ」なる心の発見を継承する本居宣長ら先人の仕事が、発見に満ちた「創造の偉業」である所以は、武家の権勢が支配する封建社会の暗さの眞の原因を、様々な形式道德の徳目をはびこらせ、人間の「直ぐ」なる心を鑄型にいれてがんに抑圧している「漢心」の支配にあることを暴露したことにとどり着く。そして、現在の人間がさかしらな智に囚われていることによつて、儒教・仏教等の外来思想が浸透する以前にあつた率直で純粹な本然の姿が歪められているという危機感を契機に、それを止揚する理想社会を「新しき古」として再発見し

たのである。まさしく「創造の偉業」という名称にふさわしい。

半蔵の内省のプロセスは、次に現実の矛盾に悩むことの多い若輩の理想主義者らしく、民衆を支配する「権力万能」の武家の時代への批判は、「この世に王と民としかなかったやうな上つ代に帰つて行つて、もう一度あの出发点から出直す」理想を感得させるのである。封建制度を根本から覆す天皇親政の「近つ代」につながる夢想である。半蔵の伊那の旅の思索を総まとめに凝縮した成果が、「彼が辿り着いた解釈の仕方」つまり、思索の個性化を意味する「解釈」の語句が使用されることで、内省の深化が強く打ち出されるのである。ちなみに、「解釈」の語句はここを唯一の用例とする。こうして、一つ分かり二つ解りする思索の総合化は、識見の乏しい凡庸人であることをかつて自嘲した半蔵を大きく飛躍させているのである。それは、伊那の旅を締めくくる次のような結語の文章が証明している。筆者は、「この小さな旅は、しかし平田門人としての半蔵の眼をいくらかでも開けることに役立った。」と控えめな書き方で始まると述べたが、とつおいつ内省を繰返した半蔵の思索の立脚点は、「どうかして現代の生活を根から覆して、全く新規なものを始めたい。さう彼が考へるやうになつたのもこの伊那の小さな旅であつた。」と、強い時代批判と堅固な意思を併せ持ったものへ転換を遂げているのである。以上のことから、半蔵が気負つて、平田篤胤歿後門人の最大の根拠地であつた伊那谷と、交友を重ねる蜂谷香蔵等の東美濃の門人達を取り持つ役割を担おうとした「中央の位置」という決意は、身の程知らずの慢心では決してなかつたのである。

### 本論・その三

#### (一) 服部之総「青山半蔵―明治絶対主義の下部構造―」への疑問

ところで、前掲の服部之総の評論は、『夜明け前』の政治史的考察と歴史小説の方法について、明治維新史研究に新生面を切り開いた講座派の気鋭の歴史学者らしい根幹からの疑問と不満を表明した批評として名高い。その批判は、幕末維新期の政治史の無理解、史料探索の杜撰さが災いし半蔵と関わりの深い美濃苗木藩の廃仏毀釈運動が盲点となつてしまつてゐることの指摘等、縦横に展開されている。就中、半蔵と平田派国学の關係についての批判は、平田派が浸透した富農・富商の階級的思想は、半蔵が救済の手を差し伸べようとする貧農と敵対する明治の絶対主義の体制思想であつた。そのため、半蔵が時代の進展から背かれて孤立する原因があつた。にもかかわらず、並行して平田派の全盛を描きいれるところに、政治史への理解不足が露呈している。さらに、半蔵のみならず友人蜂谷香蔵らの国学運動家までが、商業的ブルジョアジーの上昇志向が抜け落ちて、「簡素清貧」(一・上・五・二)主義に描きかえられているのは、史実を歪めた歴史の捏造である。以上のような弱点となつた問題点を列挙していることで明らかのように、服部の批判は痛烈を極める。

このような全面否定の論点の全てに検討を加えるのが本稿の目的ではない。以下の論述では、『夜明け前』が探究した基軸である平田派国学運動の展開が、明治三年を全盛期であると断定している歴史的判断は、明治五年以降「大教院」の設置によって神仏合同の祭政一致の大宣教が全国に展開されたことを例証にして、重大な「錯覚」であると断じていることについて検討しなおしたい。なぜならば、わたくしは『夜明け前』に書かれた平田派の活動の変遷史は、筋道の通つた説

明の一貫性が確保されていると考えるからである。服部の批判は、筋の通った表現の論理を一方的に無視した性急な否定に終わっているように思われる。すなわち、『夜明け前』の平田派国学の盛衰史は、暮田正香が半蔵に語る次のような回顧談で、「先生を中心にした時代は——まあ、実際の話が、明治の三年までだね。」(二・下・九(四))と述懐しているように、篤胤歿後の門人を糾合した廉潔の士平田鉄胤を中心とした活動に純粹な運動の精華があったことを、主要な門人の榮枯盛衰、平田派入門者数の推移、官制上における神祇官の位置づけの激変等を織り交ぜて活写しようとしているのである。そこに『夜明け前』独自の史的判断が主張されていると評価すべきである。要するに、平田派国学運動の全盛期が明治三年までであると強調する『夜明け前』は合理的根拠を有するのである。

明治五年から明治八年にかけて全国に展開した神道国教化政策の「大宣教」は、神道家・仏教家間の対立を激化させ、祭政一致の道徳革命の宣撫が行われたい混乱に帰着するが、『夜明け前』は、明治五年以降の掛け声ばかり盛んであった「宣布」の歴史を無視している訳ではない。この転落と瓦解のプロセスは、『夜明け前』に王政復古の新政を求める熱気と情熱に溢れた平田派全盛期の活動から、冷静に客観的に振り返えられているのである。その箇所を例示するならば、第二部下巻第十一章第二節に大教院の全国的宣布活動が矛盾と混乱の拡大の上に自壊した歴史と、それ以前の鉄胤を中心とした運動は明確に対照的に意味づけられる。つまり、鉄胤を中心とした神仏分離の活動は、長い墮落の歴史を自浄することが出来なかった「僧侶の勢力も神仏混淆禁止令によつて根から覆されたのである。」(二・下・十一(二))と、根本的な意義を闡明する史的整理が行なわれているのである。なお、滝藤満義(注16)は、服部の批判を首肯しつつも、それに固執することなく、作品がどのように史料の「虚構化」を行っているかに焦点を当てる論究に立ち返る必要性を説く。『夜明け前』と史

料の関係を徹底的に精査した北小路健の代表作『木曾路文獻の旅』(正・続(注17))の実証的研究が切り開いた方法は、その画期的な目撃すべき成果が証明している通り、今後とも継続されるべきであるが、服部の批判に全て反論は出来なくても、作品自体に史実誤認の否定に抗する表現の論理があることを解釈的に明らかにしていくことも重要なのである。

さて、『夜明け前』における平田鉄胤に結集した平田派国学運動を検討する場合、高木博志「神道国教化政策崩壊過程の政治史的考察」(注18)は、目から鱗が落ちるような検討結果を示している。高木の論考は、政府内の保守的尊攘派が一掃されていく過程を精緻に追究した論文で、平田派の一大勢力の拠点となった神祇官、教育機関としての大学校において平田派国学者が失脚していく過程を詳述している。とりわけ、明治四年三月の「平田派国事犯事件は、神道国教化政策に直接かかわった平田派国学者集団の没落に、決定的とどめをさす。」と指摘し、事件に連座した平田派の主要なイデオログたちは、丸山作樂は征韓の企てによつて、矢野玄道・角田忠行・権田直助たちは、大嘗祭の施行方法をめぐる対立から、祭政一致運動の表舞台から遠ざけられた経緯が論証されている。そして、その政治史的な意味は、「平田派国事犯事件は、政府内外の尊攘主義一掃の一環であったのだ。換言すれば、「最後の攘夷党」である平田派国学者集団に対する処断であった。」と位置づけられている。なお、平田派崩壊の輻輳する諸要因の一つに大嘗祭をめぐる紛糾があるが、それが原因となり失脚の憂き目にあつたケースについては、高木博志「明治維新と大嘗祭」(注19)に詳しい。

高木が列挙した固有名詞は、角田忠行が暮田正香の仮名で、攘夷から王政復古の運動の流れにおいて半蔵としばしば交流するのを代表として、師鉄胤の指導の下に集まった同門の集団は、半蔵が「師の周囲には平田延胤、師岡正胤、権田直助、丸山作樂、矢野玄道、それから

半蔵には殊に親しみの深い暮田正香等の人達が集まつて、直接に間接に復古のために働いた。」(二・下・十一 (二二))と回顧する条によつて、読者にとつてはすでに馴染みのある既知の人物なのである。もちろん『夜明け前』は、これら復古的イデオログが政治の表面から退場する理由について、「あまりに昇進の早いのを嫉む同輩のために讒せられて、山口藩和歌山藩等にお預けの身となつた」(二・下・九 (四))暮田正香への言及を例外にして、明快に記述されている訳ではない。調査の不徹底が指摘できよう。

### 本論・その三

#### (二) 平田鉄胤に領導される平田派国学運動の史的整理

それでは、『夜明け前』の平田篤胤歿後の活動史は、どのような独自で一貫した史的整理がなされているかについて検証して行くことにする。『夜明け前』は、平田派の興廢について、一、入門者の増減から見た平田派の盛衰、二、政治の表舞台で時を得顔に振る舞つた重用の時期、三、明治の中央官制の頂点に置かれた神祇官制度の急激な変更・改廢など、様々な側面から表現を行い、運動の興廢の全体像を示そうとしている。

まず、平田篤胤歿後の門人数の記述が、どのような働きをしているかについて確認しておこう。第二部下巻第九章第五節に、次のような表現がある。「先師歿後の門人が全国で四千人にも達した明治元年あたりを平田派全盛時代の頂上とする。伊那の谷あたりの最も篤胤研究のさかんであつた地方では、あの年の平田入門者なるものは一年間百二十人の多くに上つたが、明治三年には十九人にガタ落ちがして、同四年には僅かに四人の入門者を数える。」伊那谷の入門者数の急落に關する数値は、前掲の『伊那尊王思想史』の第三章第三節「平田門人の蕃衍」に挿入された「信濃国平田篤胤歿後門人数一覽表 附東濃地

方「安政元年より明治七年に至る二十二年間」の集計一覽に基づくことが明らかである。平田派の浸透力の変動傾向を入門者数で推定する書き方は、表面的すぎるといふ誇りを免れないが、数値自体に意味するところを要約させるならば、平田派の全盛期が明治三年より二年前の明治元年に頂点を極めており、その後も平田派イデオログが政治の中心に蟠踞し続けた高揚の時期とは裏腹に、向背する人心の変化が急激に進行していたことを暗示する説明になっている。「いかに平田門人としての半蔵なぞがやきもきしても、この類勢をどうすることも出来ない。」(二・下・十一 (四))と落胆し、同様に暮田正香が「何が『古事記伝』や『古史伝』を著した人達の真意かもよく解らないうちに、みんな素通りだ。いくら、昨日の今は今日の旧だといふやうな、こんな潮流の急な時勢でも、これぢや——まつたく、ひどい。」(二・下・九 (四))と長歎する箇所を典型として、平田派の活動家は皆個人の力ではいかんともしがたい「時勢」の力の前に、拓落失路を嘆かねばならないのである。このような人心の急激な離反は、復古運動が民衆の裾野へ支持を広げることを信じて疑わなかつた平田派国学者の悲劇の背景となつていたのである(注20)。

なお、北小路健(注21)は、無窮会神習文庫蔵の『平田先生授業門人姓名録』によつて入門者数の推移を「明治元年には一挙に九百六十人、二年には七百二十一人という具合で、『東行日記』(注 蜂谷香蔵のモデル間秀矩の日記)の書かれた明治二年前後は、文字通り平田派の全盛期であつたことは明らかである。」と指摘している。上記の『平田先生授業門人姓名録』は、田中宇一郎「夜明け前」と私(「政界往来」昭43・11)によると、藤村が『夜明け前』の準備段階で実見していた資料である。平田派の活動の浮き沈みは、前掲高木の論文が考察しているように、政治的な様々な要因が絡んでいるので、平田派全盛を入門者数で決定するのはやや短絡的すぎる。しかも「明治二年前後」と幅を持たした指摘である。しかし、これはこれで重要な調査

結果である。平田篤胤歿後の門人数の変動は、その運動の裾野の地盤沈下を示す証拠である。平田派全体の凋落傾向は、明治五年の「大宣教」以前に遡るといことがはつきりするのである。

次に平田鉄胤等、平田派イデオログの重用時代について確認しておこう。平田鉄胤を中心に結束して復古の機運を確実にしようとする運動を重視した記述は、以下のような、明治元年の天皇の東行、そして翌二年の東京遷都に触れた表現にもたどることが出来る。第二部上巻第六章第六節に、篤実な思想の継承者鉄胤を中心に平田派が時代と政治の中核に乗り出していく意気盛んな状況が以下のように述べられている。

師鉄胤の噂がいろ／＼と出ることは、半蔵の歩いて行く道を楽しくした。こんな際に、中央の動きを知るとは、彼に取つての何よりの励ましといふものだつた。彼は延胤一行の口から出ることを聞き泄らすまいとした。過ぐる年の十月十三日に旧江戸城に御着になつた新帝にも一旦京都の方へ還御あらせられたと聞く。それは旧冬十二月八日のことであつたが、更に再度の東幸が来る三月のはじめに迫つてゐる。それを機会に、師鉄胤も御供を申し上げながら、一家を挙げて東京の方へ移り住む計画であるといふ。延胤が旅を急いでゐるのもそのためであつた。飽くまで先師の祖述者をもつて任ずる鉄胤の方は参与の一人として、その年の正月からは新帝の侍講に進み、神祇官の中心勢力をかたちづくる平田派の学者を率ゐて、直接に新政府の要路に当つてゐるとか。今は師も文教の上にあるひは神社行政の上に、この御一新の時代を導く年老いた水先案内である。全国の代表を集めて大に国是を定め新制度新組織の建設に向はうとするための公議所が近く東京の方に開かれる筈で、その会議も師のやうな人の体験と精力とを待つてゐた。

前掲高木博志の論文「明治維新と大嘗祭」を参照すると、上記の引

用文は、以下のような政治史的な一齣に関係している。明治元年十月十三日の明治天皇の東行は、「戊辰戦争が未だ鎮圧しきらない関東の「綏撫」が目的」で、それに引き続く翌二年三月になされる東京奠都は、引き続き第一に「関東難治への対応」、第二に「横浜を掌握することの外交的意図」、第三に京都に残留する公家社会への対応を目論んで実行された。『夜明け前』の記述にはこのような政治史的考察に乏しい。しかし、強調されていることは、平田鉄胤の息子で「若先生」と将来を嘱望されている延胤の口から、師事する鉄胤が神祇官の行政官制度を動かし、学問・教育によって国民を教化する大役に就任する輝かしい近況が半蔵を強く感動させているのである。

第二部下巻第十一章第二節に、前述したように鉄胤を筆頭に、師事した諸門人について一覽されている。「何と言つても、以前の神祇局は師平田鉄胤をはじめ、樹下茂国、六人部雅楽、福羽美静等の平田派の諸先輩が御一新の文教あるひは神社行政の上に重要な役割をつとめた中心の舞台である。師の周囲には平田延胤、師岡正胤、権田直助、丸山作楽、矢野玄道、それから半蔵には殊に親しみの深い暮田正香等の人達が集まつて、直接に間接に復古のために働いた。半蔵の学友、蜂谷香蔵、今こそあの同門の道連れも郷里中津川の旧廬に帰臥してゐるが、これも神祇局時代には権少史として師の仕事を助けたものである。」このような面々が政治の表舞台で祭政一致の活動を推進した中心時期は、半蔵の良友である暮田正香が次のように振り返った歴史的評価に集約されている。「明治御一新の声を聞いた時に、先生は六十七歳の老年だからね。先生を中心にした時代は——まあ、實際の話が、明治の三年までだね。」(二・下・九・(四))。これに対して、半蔵が「あの年の六月には、先生も大学の方をお辞めになつたやうに聞いてゐますが。」と応じているのは、『伊那尊王思想史』に「明治元年二月、参与神祇事務局判事に任ぜられ、後内国事務局判事となり、二年正月侍講となり、同年七月大学博士となる。三年六月職を辞し、後

大教正に補せられ、十五年十月八十二歳を以て東京に歿した。」という条に拠ったのか。ともあれ、鉄胤が明治三年大学を辞し公的活動の第一線から身を引いたことを挙げて同調する半蔵の返答によって、鉄胤の重用時代が明治三年までであることを根拠づけているのは動かないのである。さすれば、暮田正香が「あの明治三年あたりまでの勢ひと来たら、本居平田の学説も知らないものは人間ぢやないやうなことまで言ひ出した。それこそ、猫も、杓子もですよ。」(同上)と、思想の流行に明け暮れる軽佻浮薄な時代風潮を慨嘆している書き方は、師鉄胤の去就を中心にした平田派運動の史的区分において、説明の乱れるところはないと評価すべきではないか。それを「錯覚」と批判する服部之総の攻撃は、『夜明け前』の記述法を尊重しない批判である。

その他、第二部下巻第十一章第二節の、平田派運動の史的整理と明治五年以降の「大教院」設置に伴う神道国教化の一大運動との関係と記述した箇所を見ると、『夜明け前』の平田派の歴史的記述に乱れないのである。半蔵は鉄胤が神祇官判事として在職していた当時を振り返って、そこに平田一門の人間によって進められた神仏分離運動が、一切の仏教の世俗化を根本から破壊していったと総覧する。その中世否定運動の破壊の大きかった所以について、寺院の利息を目当てにした金貸し行為をやり玉に挙げる等々から、「天海僧正以来の僧侶の勢力も神仏混淆禁止令によつて根から覆されたのである。」という総括に達する。以上、全て半蔵の内言語である。その後、神祇官の官制が編成がえになった半蔵の教部省出仕時代において、その後の神仏合同の大教院を中心とした国民教化運動の混乱が、真宗五派の合同大教院からの分離等を経て、組織的活動の終焉を迎える経緯が素描される。つまり、大教院によって、神仏合同の全国的な国民教化政策が大々的に繰り広げられたが、それは共同一致の活動の実を上げるどころか、矛盾と混乱と葛藤を拡大していくことでその使命を果たし得なかつたという歴史的評価が下されているのである。

続けて、行政官上の神祇官の位置づけの変動について確認しておく。前記の『夜明け前』第二部下巻第九章第五節に、復古の大方針に基づいて祭政一致の官制の頂点に位置した神祇官が、政府内部の方針変更に伴い神祇省に格下げになり、さらには教部省から文部省への合併へと縮小解体されていく制度的大変動に言及している。

正香の所謂「政治を高めようとする」祭政一致の理想は、やがて太政官中の神祇官を生み、鉄胤先生を中心にする神祇官は殆んど一代の文教を指導する位置にすらあつた。大政復古の当時、帝には国是の確定を列祖神靈に告ぐるため、わざ／＼神祇官へ行幸し給うたほどであつたが、やがて明治四年八月には神祇官も神祇省と改められ、同五年三月にはその神祇省も廃せられて教部省の設置を見、同じ年の十月には遂に教部文部両省の合併を見るほどに押し移つて来る。今は師も古い、正香のやうな先輩ですら余生を賀茂の方に送らうとしてゐる。さういふ半蔵が同門の友人仲間でも、香蔵は病み、景造は隠れた。これには彼も腕を組んでしまつた。

余りにも急激な制度の改廃、老いて指導の第一線から退隠した師と失意の同門仲間の現状に半蔵は茫然とするのである。上記引用文中の前には、篤胤研究の一大拠点であつた伊那の「地方」の入門者数が激減した推移が述べられている。それと「中央」の機構制度の改廃が符合しているという説明になっている。半蔵は、厳然とした数値が証明した向背常ならざる人心の離反と、官制改正を断行した政府の開明的方針変更のダブルパンチを浴びているのである。そして、時流の外へ追いまくられていく平田派の暗澹とした前途に憂慮を深め、頽勢を如何ともしがたく拱手するしかない半蔵に到達させているのである。その他、第二部下巻第十一章第二節に、神祇官の時代には最も重要であつた祭祀の式典が、明治四年八月に改称された内外の儀式に関する事務を管掌する式部寮へ所管が移つた「一事」を例示するだけでも、

創業当初の意気込みの低下を証明するものとして書かれている。かなり歴史的变化への説明は丁寧である。

以上のように、平田鉄胤を中心とした一門の活動は、平田篤胤歿後門人の趨勢を記述した箇所、政府の復古政策の方針替えにもなって官制上の神祇官の位置づけが大きく変化する経過、神祇官判事の要職に就任し改革に重用された鉄胤らの記述面からも、平田派の活動の隆盛から凋落の展開は、筋の通った概観と整理が行われている。鉄胤に指導統率された篤胤歿後の門人の活動に精華があったとする明確な価値判断を打ち出していることからすると、明治五年以降、大教院による神仏合同の国民教化が、混乱・不徹底・失敗に終わったという事実経過をあっさり確認する書き方になっても、決して史実に忠実ではなかったという批判を受ける必要はないと考える。

#### おわりに

研究の視点と方法の確認を踏まえて、いくつかの問題点の解明を試みた。特に、服部之総が下した批判に対して、『夜明け前』に貫かれている平田派国学運動の顛末は、篤胤歿後門人数の推移、鉄胤等の重用の時期、神祇官の官制制度の変化等種々の視点を複合させて、説得力のある歴史記述たりえていることが確認できたように思う。このことは、幕末維新期の膨大な歴史叙述と街道に生きる半蔵の関係について、平田派の国学運動、請願する庄屋への成長の追究を見届けることによつて、笹淵友一が「これらの歴史的事象は単なる外界でも背景でもなく、彼の意識内容に外ならない。」(注22)と指摘しているように、押さえ直していく作業もかなりの部分可能になると思われる。半蔵の思索の深化過程については、引用された本居官長『直毘霊』・平田篤胤『静の岩屋』等の本文を一心不乱に沈黙考する半蔵の内言化された思考のプロセスとして書かれ、併せてその思索に没頭する姿が照応する表現構造によつて鮮明にされている。これらの思索の内実と表現

構造の詳細な分析は、別稿に譲らねばならない。その他、表現世界の魅力をも、日本人の故郷としての「木曾路の風物」の普遍的象徴として賛美した加賀乙彦(注23)の重要な視点等、課題が山積しているが、いずれ機会を得て補正して行く予定である。

#### 注

- 1 第一部は、昭和七年一月新潮社から、その後定本版「藤村文庫」の第一篇として、昭和十年十一月同じく新潮社から再版される。第二部は、定本版「藤村文庫」の第二篇として、昭和十年十一月に新潮社から刊行された。
- 2 亀井勝一郎『島崎藤村論』(昭28・12 新潮社)
- 3 以下、第一部下巻第十二章第四節等の巻・章節数の表記については、一・下・十二(四)のように略記する。
- 4 伊豆利彦「夜明け前の世界」(『民主文学』116、1975・7)
- 5 服部之総「青山半蔵——明治絶対主義の下部構造——」(『文学評論』昭29・1)
- 6 饗庭孝男「言葉」と歴史」(『文学界』昭53・5)。のち、『批評と表現 近代日本文学の「私』』(昭54・6 文芸春秋)に「言葉」と歴史——島崎藤村『夜明け前』」の題で収録。
- 7 三好行雄「夜明け前」の方法——序の章をめぐる——(『藤村全集』月報16、第15巻付録、昭43・6、筑摩書房)
- 8 平岡敏夫「夜明け前」論への出発」(『解釈と鑑賞』昭54・10)も三好行雄と同様に、序の章第三節が、第一部上巻第二章第四節・第二部下巻第八章第二節において、「十八歳」の記憶を蘇らせる小説内での照応する表現構造を重視している。この照応関係の積み重ねが、山林事件への全面的な関与へ発展して行くのはい

- 9 うまでもない。  
『国史大辞典』第十卷（平元・9 吉川弘文館）の「名主・庄屋」の項目解説によると、「名主・庄屋は一村の長で、（中略）社会的にも経済的にも最も優位にある者で、世襲するのが普通であった。（中略）名主・庄屋の任務は村方の全般に関する事務であるが、特に年貢の納入、戸籍事務、道橋の普請、村民の願書・契約書などの奥書などは重要なものであった。」と説明されている。庄屋の重要事務の一つは、村民の要求を上訴する「願書」への書名である。支配権力と村民の双方への配慮を考慮しなければならなかった吉左衛門が熟慮の結果取った行動は、重要な検討事項になろう。
- 10 三好行雄「歴史への序曲―夜明け前・序の章」島崎藤村」（『作品論の試み』所収。昭43・6 至文堂）  
注10に同じ。
- 11 市村威人『伊那尊王思想史』（昭4・11 下伊那郡国民精神作興会）。ただし、以下の本書からの引用等は、昭和四十八年八月、国書刊行会から刊行された復刊本による。
- 12 「信濃国平田篤胤歿後門人数一覧表 附東濃地方」〔安政元年より明治七年に至る二十二年間〕は、前掲注12の『伊那尊王思想史』に挿入された付録で、伊那・東濃地方に浸透した平田派の趨勢を窺うことのできる貴重な集計データである。
- 13 『新編日本古典文学全集 87 歌論集』（2002・1 小学館）による。
- 14 『本居宣長全集』第九卷（昭43・7 筑摩書房）による。
- 15 滝藤満義「『夜明け前』―方法と思想―」（『島崎藤村―小説の方法―』（平3・10 明治書院）
- 16 北小路健『木曾路文献の旅』（正 1970・7 芸艸堂、続1971・5）
- 17 高木博志「神道国教化政策崩壊過程の政治史的考察」（『ヒストリア』一〇四号 1984・9）
- 18 高木博志「明治維新と大嘗祭」（『日本史研究』三〇〇号 1987・8）
- 19 なお、安丸良夫・宮地正人編『宗教と国家（日本近代思想大系5）』（1988・9 岩波書店）の宮地正人「国家神道形成過程の問題点」には「当初から木戸孝允などは平田派国学者グループには嫌悪感をいだいており、また東京遷都論や大嘗祭の執行場所をめぐる内部の意見対立はなんら解消されず、そして明治四年（1871）一月の広沢参議の暗殺を機に、平田派国学者は政治の舞台から一掃される。」と述べられている。一連の高木博志の論文は、宮地正人の解説に注として紹介されていたことで知り得た。
- 20 その他、吉田精一『自然主義の研究』下巻（昭33・1 東京堂）が祖述紹介した麻生義輝『近世日本哲学史』（昭17・7 近藤書店）は、「制度的に見れば明治元年から二年にかけてが平田派全盛の頂上」で、昌平黉大学における平田派国学者は、「明治二年八月大学校内に於いて学神祭の挙行せられた一事」を以て得意の頂点に達するが、「三年七月諸役員は免職を命じられ」一気に凋落の悲運を舐める経過について明らかにした著書である。服部之総が『夜明け前』の平田派国学運動の歴史が錯覚で貫かれていると決めつける批判に関して、一定度の反証の力を持った指摘である。
- 21 「回顧（父を追想して書いた国学上の私見）。本文の末尾に「昭和十六年一月雪の日脱稿」の識語がある。この後年の回想に、「篤胤歿後の門人が全国で四千人にも達したと言はる、明治元年あたりを平田派全盛時代の頂上とする。（中略）伊那の谷あたりの最も篤胤研究のさかんであつた地方では、維新直後の平田入門者は

一年間百二十人の多くに上つたが、明治三年には十九人に減じて、同四年には僅かに四人の入門者を数へるに過ぎなかつた。これほど急激な凋落は何を語るものだらう。」と、門人数の急減する数値に言及した『夜明け前』と同文と見てよい文章がある。入門者の急落傾向を指摘する『夜明け前』の書き方に固執し続けるところに藤村の変わらぬ判断がある。

21

22

23

北小路健 『木曾路文献の旅』(芸艸堂 1970・7)

笹淵友一 「夜明け前」——叙事詩時代を生きた一愛国者の悲劇——」(『小説家島崎藤村』平2・1 明治書院)

加賀乙彦 「故郷の山と狂気・『夜明け前』」(『日本の長篇小説』

1976・11 筑摩書房)